２０２６年度　一般編入学（後期）試験　国際学部　小論文

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

「非言語コミュニケーション」とは、言語ではなく身振りや動作、表情などで意思を伝えるコミュニケーションを指す。よく、言葉が通じなくてもジェスチャーを使えば何とかなると言われる。確かに、身振りが意思疎通を助けることもある。

しかしジェスチャーは、言語コミュニケーションと同じように、文化によって意味が異なる。異文化での身振りが自分の文化にない場合は、まったくコミュニケーションが成立しない。同じジェスチャーでも文化によって意味が異なる場合は、誤解が生まれる可能性が大である。

一般的に、首を縦に振る頷きは「承諾」の意味、横に振るのは「拒否」であるとされるが、正反対の文化もある。日本からの駐在員の経験では、現地の部下が首を横にふるたびに、「わかりました」という意味であると頭では理解していても、つい自分の指示が拒否されたと感じてしまい、これは最後まで直らなかったと語る。

目を見て話すことが大切な文化がある一方で、目上の人と話す際に目を合わせるのは失礼になる文化がある。英語圏の学校に通うアジア系やアフリカ系の生徒が、先生という目上の存在に対し、あえて視線を外すことがあるが、英語圏の教師は、目をそらすのは嘘をついているか反抗しているからだと解釈し、印象が悪くなる、という研究結果もある。

非言語コミュニケーションには、ジェスチャー以外の要素もある。人間が他人と会って相手を判断するのは表情や声色、語調が主で、何を話したかの内容より、どう語られたかが判断を左右する、ともされる。

リンカーン(Abraham Lincoln)は、勝つ見込みがまったくないのに共和党候補として立候補し、大方の予想を裏切って第一六代アメリカ合衆国大統領になった。その背景には、政治的手腕もさることながら、彼の語りにはユーモアがあり、やさしさや思いやり、配慮や誠実さがにじみ出ていたからだと、歴史家グッドウィン(Doris K. Goodwin)が指摘している。

一九六〇年のアメリカ大統領選挙では、初めて候補者同士によるテレビ討論が生中継された。討論前はニクソン(Richard M. Nixon)副大統領の支持率が高く、ラジオで議論を聞いていた人々はニクソンが優勢と感じた。しかし、第一回テレビ討論の視聴者八〇〇〇万人の多くはケネディ(John F. Kennedy)が優勢と感じた。精悍で力強く、カメラを真っすぐに見つめて語るケネディに対し、ニクソンは精彩にかけ、汗をたびたび拭う姿が焦っているような印象を与えたのが敗因とされる。その結果、テレビ討論後の支持率が急増したケネディが第三五代大統領として就任した。

（鳥飼玖美子著『異文化コミュニケーション学』　岩波書店　二〇二一年）

注意事項

一　各設問の解答の字数が少ない時は、大幅に減点する。

二　解答は縦書きとする。横書きにしたものは無効とする。

設問一　右記の文章を四〇〇文字以内で要約しなさい。

設問二　あなたが将来、非言語的コミュニケーションが異なる、異文化の方と関わることになった場合、どのような点に留意して関わろうと思いますか。そのように関わる理由も含めて、あなたの考えを四〇〇字以内で述べなさい。